

自家用車で行くサハリン

ERINA調査研究部研究員 川村和美

はじめに

国土交通省北陸地方整備局による日本海横断国際フェリー航路開設可能性調査の一環として、2003年9月22日～27日にサハリンを訪問した。この訪問の目的は、稚内～コルサコフ間を結ぶ国際フェリーに乗船し、その実態を調べること、日本からバイク・乗用車の乗り入れの現状を探るため、実際に乗用車を持ち込み、その手続きの詳細、走行上の安全性、問題点を探ること、サハリン～日本、サハリン～ロシア大陸部分間の物の流れの現状を把握し、今後の整備計画・可能性を明確にすることであった。ここでは、ERINAとしても初めての事例であるサハリンへの車の乗り入れの状況について報告したい。

ロシアも日本もジュネーブ条約に加盟しているため、自国で国際免許証を取得すれば相手国内で車を運転することができる。車やバイクの持込についても一時輸出の手続きをとるため、日本からロシア、またロシアから日本へも持込が可能である。ただし、持ち込んだ車で走行できるかどうかは、その国の道路交通法による。例えば、日本では車検を通った車以外は整備不良車両とみなされ走行は不可能である。ロシアから持ち込んだ車が日本の整備基準に合わなければ、走行はできない。

1999年にサハリン～コルサコフ間にフェリー航路が開設したことにより、自分の車やバイクをフェリー乗船時に携帯品としてサハリンに持ち込み、サハリン内を走る人が現われた。特に夏場は、日本からバイクで乗り入れて、サハリンの大自然の中を走ったことのある人は少なくないらしい。しかし、実際に車やバイクでサハリンに行ったという人には出会ったことがなかった。それならば、自分たちで体験してみようと、今回、実際に車を持ち込むこととした。そして、その際の各種手続き、走行の安全性や自由度などについて、疑問に思うことを一つ一つ体験することで、実態の把握を目指した。

事前手続きについて（フェリー乗船まで）

調査は、日本からサハリンに車を持ち込む際の手続きを調べることから始まった。まずは、稚内～コルサコフ間の国際フェリーを運航している東日本海フェリー株式会社に問い合わせた。それによれば、関連手続きは表のような流れとなっている。

流れに従って早速手続きを開始した。まずは国際運転免許証の取得である。新潟の場合は、新潟県運転免許センター

(聖籠町)に行き、必要書類に記入し、写真・手数料を添えて申し込む。申し込みから約1時間後に国際運転免許証が交付される。その日は、筆者以外に10名ほどの申請者がいたが、渡航先はほとんどが米国で、ロシアと記載したのは筆者だけであった。

国際運転免許証取得後は、陸運局へ行き、登録証書の発行を申請した。国外に自分の車を持って行くというケースは、国際免許証の取得と比較して、極端に少ないようで、発行の手続きも過去の例に照らし合わせてゆっくりと一つ一つ確認しながらの作業であった。申請から交付までこちらも約1時間を要した。

この登録証書を取得した後は、そこに記載されている国際ナンバーを確認し、小松自動車工業株式会社へナンバープレート注文する。注文し、入金してから入手まで、約10日間を要するため、出発までの日数をあらかじめ確認しておく必要がある。これに加えて、識別記号シール(Jシール)を入手する必要がある。これの申請先はJAFである。

上記の手続きとあわせて、稚内～コルサコフ間フェリーの乗船申し込みをすれば、事前の手続きは終了である。国際運転免許証や登録証書の取得は、警察本部免許課(あるいは運転免許センター)や陸運局登録課が近くにあれば、それほど時間をかけることなく所定の書類を手に入れることができるが、Jマークや国際ナンバープレートの取得・作成には時間がかかるため、注意が必要である。あわせて、ロシアのビザも取得しなければならない。今回は、事前の手続きに関する調査と実際の手続きを合わせて、約1ヶ月を費やした。

表 サハリンへ車・バイクを持ち込む際の手続きの流れ

国際免許証の取得	<ul style="list-style-type: none"> 都道府県警察本部免許課で取得(地域によっては運転免許試験場でも取得可) 日本の免許証、パスポート、印鑑、顔写真、手数料が必要
登録証書の取得	<ul style="list-style-type: none"> 車輛を管轄する陸運局の登録課で取得 車検証、パスポート、印鑑、手数料が必要
国際ナンバープレートの取得	<ul style="list-style-type: none"> 「小松自動車工業株式会社」に「国際ナンバープレート」を発注(ナンバーは登録証書に記載) 注文書に必要事項を記入し、登録証書のコピーを添えて申込 代金送金後、10日程度で入手可能
乗船申込 税関手続き	<ul style="list-style-type: none"> 車輛の携帯を申込む 稚内税関支署で必要書類を整えて申告 出港前日の手続きも可能 日本通運稚内支店に手続きを代行してもらうことも可(有料)
乗船 船内での手続き	<ul style="list-style-type: none"> 税関手続き終了後、車輛積み込み ロシア税関申告書と「お持ち帰りの契約書」に携帯車輛内容を記入
ロシア入国	<ul style="list-style-type: none"> 税関に登録証書を提出 国境警備隊と税関の車輛検査後、通行許可証発行
ロシア出国	<ul style="list-style-type: none"> 出国用の税関申告書に記入し、通行許可証を提出 登録証書を受け取る
日本入国	<ul style="list-style-type: none"> 入国前に車体・タイヤを洗浄(日本への土の持込は禁止)

(出所)東日本海フェリー㈱

稚内からコルサコフへ

稚内では、フェリーターミナルの比較的近くに位置する税関での手続きを終えてからターミナルへ移動し、車輛を積み込み、出国審査を受け、フェリーへと乗り込む(写真1)。



写真1 稚内港のアインス宗谷(提供: 樺地域開発研究所)

稚内～コルサコフ間を結ぶ「アインス宗谷」は、総トン数2,628トン、旅客定員223名、車輛積載能力8トントラック18台、乗用車45台のフェリーで、両地域間を5時間30分で運行している。

船に乗り込みしばらくすると、係の方が呼びに来て、その方のサポートの下、車輛を持ち込む際のロシア側への提出書類に必要事項を記入する。ロシア税関申告書(車の種類や排気量、製造年、エンジン番号などを記入)や誓約書(車を販売・交換・寄贈しない、持ち帰らないときはロシアに帰属しても良いという内容)に加え、日本側の入管申告書や税関申告書、自動車一時輸出入申告書などを整える必要があった。

手続きを行ったり、周りの景色を楽しんだり、上映されているビデオを鑑賞したりしているうちに、時間は過ぎ、現地時間の17時30分にコルサコフ港に到着した(写真2)。到着後は、車輛を携帯している場合でも一般旅客同様に手荷物を持ってバスに乗り込み、ターミナルへと移動する。ターミナル内で入国審査と税関審査を受けた後、再度フェリーに戻る。船内では、税関と国境警備隊による車両検査(写真3)が行われており、それをパスすると、通行許可が出る。フェリーから車を移動させたところで、日本のナンバープレートを国際ナンバープレートに付け替えておいた。

サハリン内の自動車走行の現状

サハリンへ車を乗り入れる際に、最も心配したのが、安全性であった。特に、ロシアの交通警察や国境警備隊など



写真2 コルサコフ港南埠頭に接岸したアインズ宗谷
(提供：樺地域開発研究所)

とのトラブルである。所定の手続きを踏み、書類は整えているつもりであるが、実際に現地へ車を持ち込んだという事例が少ないため、他にも必要な書類があるのか、交通警察や国境警備隊などへの特別の申請が必要なのか、国際ナンバープレートでの走行に問題はないのか等、疑問だらけであった。

その疑問を解消するため、サハリン州政府の交通担当部門及び交通警察の責任者を訪問し、話を聞いた。それによれば、国際免許証（または日本の免許証とロシア大使館・領事館が証明する免許証の内容のロシア語訳）があれば、ロシア国内で運転することができるとのことであった。また、観光客が車を持ち込む場合は、国際ナンバープレートはもちろん、日本のナンバープレートでも問題ないと言う。ただし、2ヶ月以上の滞在の場合は、ロシアの自動車検査証を取得し、ロシアのナンバープレートをつけることが義務付けられる。基本的にはサハリン州内は自由に走行できるが、サハリン北部などの特別な地域（道路が十分に整備されていない場所や、サハリンプロジェクト関連で工事中の場所）へ車を乗り入れる場合は、国境警備隊の許可証が必要となるため、事前に申請しなければならないとのことであった。なお、必ずしも必要なものではないが、交通警察に走行期間、走行ルート、同伴者、車輛データ、国際免許証を提示し、申請することで、「ルート利用許可証」を取得すれば、不要なトラブルを避けることができるとのことであった。

日本からサハリンに車やバイクを乗り入れる場合は、サハリンの旅行社が窓口となって手続きを代行してくれるため、旅行社に依頼するのが最も簡単な方法であると教えてくれた。

所定の手続きを踏めば、サハリン内を自由に走行できるが、その際の安全性はどうだろうか。サハリンに滞在する



写真3 コルサコフ港のアインズ宗谷上でのロシア係官による検査
(提供：樺地域開発研究所)

日本企業の方々に話を聞くと、車の盗難（部品・装備品の盗難を含む）を心配したり、街道沿いにはほとんど給油スタンドがないか、あっても給油機が小屋の中にあるなど探しにくい上、ハイオクガソリンは都市部にしかないなどガソリン事情を心配しており、自家用車の乗り入れはあまりお勧めできないとの意見が大半であった。こうした問題・トラブルを避けるため、車やバイクを乗り入れる場合は、旅行社を通じたり、現地に詳しいロシア人を同行させるなどの方法をとることが望ましいとアドバイスしてくれた。

ちなみに、2003年にアインズ宗谷を利用して、サハリンに持ち込まれた車は11台、バイクは17台である（9月25日現在。10月予約分含む）。持ち込み期間は1週間程度が最も多く、夏場に集中している。その数は多いとは言えないが、実際に車やバイクでサハリンを訪れている人がこれだけいるのである。

保険への加入

さて、出発前からの懸念事項であったのが、自動車保険への加入であった。日本国内の保険は適用されないため、現地で任意保険に入ることを検討した。しかし、保険加入に関する情報は極めて少なかった。旅行社や現地企業などに問い合わせてもなかなか明確な答えが返ってこない。このフェリーを利用した車の持ち込みはその数がまだ少なく、モデルケースとなるようなものもない。バイクを持ち込むケースは比較的多いが、保険はかけずに乗っている人がほとんどとのことだった。

私たちは、現地で保険に入れるかどうかを明らかにすることも今回の調査の目的として、事前にサハリンに進出している日本企業やコルサコフ港などに問い合わせ、ユジノサハリンスクにある保険会社を紹介してもらった。ここでは15日間までという短期間の保険加入が可能である。出発

前に、国際免許証や登録証、車検証をはじめとする各種車輛情報をファックスで送り、保険内容を打ち合わせた。そして、契約書にサインをした日からではなく、コルサコフ港に到着し、フェリーから車を下ろすところから保険対象となることを依頼した。

出発前に、電話やファックスを活用して加入手続きを進めた保険の保証内容は、車輛保証25,774ドルまで、第三者に対する保証は5万ドルまで、同乗者に対する保証金は2万ドル×7名（7人乗りの車であったため）で、保険料は462ドル（ただしルーブル払い）というものであった。契約は、サハリン到着後、実際に車を見て、エンジンの型、エアバッグの有無、カーステレオなど、装備品、車体の傷など、装備品や車体の状態などを確認（写真5）してからということとなった。契約時に、同乗者に対する保証を7人から4人に変更したい（実際に乗るのは最大でも4人であったため）と申し出たところ、快く対応してもらえ、保険料は当初予定より30ドル安い432ドルに変更してくれた。この臨機応変な態度には好感が持てた。

このような任意保険への加入は、今年の4月から可能となったとのことであるが、あまり知られていないようである。契約の内容の確認や車の状況のチェックなど、一連の手続きを考えると、ロシア語ができる人がいなければ加入は難しいと言える。保険への加入がより簡単に、入国（入港）後、すぐにコルサコフ港でできれば、保険への加入者、そして車を持ち込む観光客の数も増えるのではないだろうか。

コルサコフから稚内へ

サハリンでは、コルサコフにある24時間監視付の駐車場に車を停めていたため、トラブルもなく、そして加入した保険の世話になることもなく、訪問を終えることができた。

出国の際は、まず出国手続きを済ませ、その後車輛をフェ



写真4 コルサコフ～ユジノサハリンスク道路
（提供：樺地域開発研究所）

リーに積み込む。この日、フェリーの中にあった車は私たちが持ち帰る1台だけであった。

フェリーの中では、入念に車の土を落とす作業を行った。日本への土の持ち込みが禁止されているためである。車1台を車体はもちろん、タイヤの溝、車体の裏側まで徹底的に土を落とさなければならない。車がびかびかに磨き上げられるまで1時間以上の時間を費やして洗車した。洗車状況を見ていたフェリーの乗客が、「車をこれだけ洗うのであれば、靴の裏も洗った方がいいのでは？」とつぶやいたのが印象的であった。

出港から5時間30分。予定通りにアインス宗谷号は稚内港に到着した。入国審査を済ませ、車をフェリーから下ろし、ナンバープレートを日本のものに付け替えて、今回の調査は終了した。

終わりに

私にとっては初めてのサハリンであった。舗装工事中の道路、建築中の建物、サハリンプロジェクトに関連するプラント建設のために動くたくさんの方々の建機を目の当たりにし、サハリンの活気を感じずにはいられなかった。

現在、サハリンプロジェクトに関わる多くの企業がサハリンに滞在し、活動を展開し始めている。こうした企業がホテルの部屋を事務所代わりに、また長期滞在する職員の宿舎として利用しているため、観光客向けに提供できる部屋数が少なくなっている。私たちが思うようにホテルがとれない状況であった。この状況はサハリンを訪れる観光客にも影響を及ぼしている。稚内～コルサコフ間国際フェリーの乗客は、昨年の4,800人から、今年は9月現在で4,200人へとやや減少している（10月の予約分を含む。運航は10月まで）。実際、私たちが乗船した9月22日（稚内～コルサコフ）は27人、9月27日（コルサコフ～稚内）は13人と利用客は極端に少なかった（定員232名、2003年の最高は141



写真5 車両検査を行う保険会社の職員（提供：樺地域開発研究所）

人)。整備が進み、活気があるサハリンであるだけに、観光客の減少という事態が残念でならない。

さて、今回の調査について、出発前に自家用車でサハリンに行くと話すと、「危ないからやめた方がいい」、「持ち込んでも走行はしない方がいい」、「今のサハリンは安全だから問題ない。面白い調査だ」などさまざまな意見が聞かれた。いずれもサハリン訪問・滞在経験者のコメントである。実際に行ってみて、サハリンに自家用車を乗り入れて自由に走行することについては、特殊な地域に行かない限り問題はないことが分かった。ただし、盗難対策は必要であろう。また、不要なトラブルを避けるために、サハリンの旅行社を通じて手続きをし、同行してもらうか、ロシアの方やロシア語のできる方に同乗してもらうことが望ましい。保険への加入手続きもフェリー到着後、コルサコフ港で簡単にできるようになれば、安心感はさらに増すであろう。実際に、車を乗り入れて、サハリンの大自然の中を自家用車で走行して、楽しんでいる人たちはいる。そして、サハリン側の旅行社もこれに対応している。簡単に手続きができ、走行の自由度がさらに増し、盗難対策が万全であることが条件になるのが、新しい観光の可能性が見えた調査となった。

米 国

(出所)『延吉統計年鑑2003』より作成